

ビザンツ史研究の道具箱

草生 久嗣

はじめに

本稿の目的は、ビザンツ史(6世紀～15世紀)の考察に際しての最も基本的な諸文献を整理し、紹介することである。ここでのビザンツ史の範囲とは、古代ローマ史研究と交錯している「古代末期、初期ビザンツ期」を除き、主にユスティニアヌス帝(527-65)以降の時代を指している。

その際、文献のジャンルは次の4種類に限った。

- A: 史料所収文献
- B: 史料補助文献
- C: 通史概観
- D: 研究動向紹介

本来研究入門で紹介するに相応しい文献としては、更に次のようなものがある。しかしこれらは筆者一人の能力に負えるものではなく、専門家が各自のテーマごとに紹介すべきであり本稿では触れなかった。

- E: テーマ別基礎文献
- F: テーマ別にエポックメイキングな文献
- G: テーマ別研究動向紹介

それでもいくつかの制限がある。まず筆者の不勉強もあって本来のビザンツ史研究には欠かせない要素、すなわち美術・考古学分野については触れ得なかった。次に通史概観文献にあっては、イコノクラスムやシスマ、首都陥落などといった重要な個別事件の文献をも挙げるべきであったがそうはせず、通史の形態を有しているものに留めている。また邦語で出版されている多くのビザンツ関連書はテーマ文献に属しているため、手頃であっても紹介されていないものがある。またいくつかの例外を除いて文献目録や註釈を付さない文献は除外した。最後に本稿で用いる言語は史料では一部ラテン語・ギリシャ語、研究においては英・独・仏語である。露・伊・新ギリシャ語など他の言語による文献は挙げていない。アルメニア語・ブルガリア語・ロシア語資料についても言及はしていない。

つまるところ本稿は、ビザンツ研究という大きな枠組みを西側から支えてきた基本文献を紹介することに専念しており、この点でいわゆる「研究入門」ではなく、むしろ研究の道具一部紹介として参照していただければ幸いである。

〈書式〉

各々の文献は略語をカッコでくくったスタイル(例: [Beck(1978)])で文中に挿入してある。それらは目録において一括して正順に整理されている。著者名・書名が和文の場合は邦語文献である。

〈先行文献〉

本稿の試みにはすでに先行する邦語文献がある。[井上浩一(1981)]、[木間瀬精三(1980)] および [渡邊金一(1968)] には簡潔な中にも専門的なビザンツ研究入門が見られる。特に専門雑誌・各国の研究状況についての解説が詳しい。また欧文であれば研究動向概観文献において、おおよそこうした情報の整理が緻密になされているはずである。詳しくはそちらを参照されたい。

A. 史料所収文献

ここでの史料とは、マニュスクリプト等の原史料ではなく文献学的批判を経たものを指す。その意味での史料は校本集・校訂出版に、さもなくばビザンツ学その他の各種専門誌に校訂が掲載された形で手に取れる。フランスの [TM.] 誌や [REB.] 誌などは学会の動向をリードするような校訂を多く掲載しており、注目されるべきであろう。同様に法史学では [FM.] 誌が様々な校訂・研究を掲載している。ちなみに専門誌にはそれぞれ個性がある。初学者はそうした性格を知るためにも雑誌のバックナンバーを、開架で閲覧できる優れた図書館で自分の目で確かめる必要がある。

テキストは西洋古典の叢書である [Budé] 叢書、[Loeb] 叢書、[SC.] 叢書、Teubner 叢書に収録されているものの他、二大ビザンツ史料集成としてまとめられているものがある。古いボン版と呼ばれる [CSHB.] シリーズ、そして目下刊行中の [CFHB.] シリーズである。CFHB. シリーズに関しては [JOB] 誌各号の巻末に目下の刊行状況・刊行予定の一覧を見て取れる。それによるとゆくゆくは CFHB. シリーズによって、昔の CSHB. 所収のテキストを全て置き換えようとする意向がみえる。

またミーニュ版ギリシャ語 [MPG.] シリーズは教父学の大叢書として揺るぎない地位を保っているが、ビザンツ史料集成としても有用である。というのもその中には神学文献のだけでなく、ビザンツの著名な歴史史料も数多く収録されているからである。ただし CSHB. シリーズ所収の再録が多い。第 162 巻は簡潔な Index であり、浩瀚な MPG. 検索に役立つ。

その他用いられることの多いものに、後期ビザンツ法集成 [Jus Gr.]、セム語史料校訂の多い [PO.] (刊行中) などがある。[Jus Gr.] に収録されているようなローマ法大全以降のビザンツ諸法は、先の [FM.] 誌や個別の出版において既におきかえられている物が多い。なおローマ法大全については古代史、法制史分野での紹介を参照されたい。これだけで一個の学問体系を築いており、テキスト・教科書・翻訳・研究など本稿の様に整理されるべき内容を有しているからである。ちなみに 10 世紀の『バシリカ法典』は Jus.Gr. には収録されていないが、[Scheltema] による新校訂が別にある。[Mansi] の公会議史料集成、[Sathas] の小歴史書集成、[Rh.-Pot.] の教会法集成なども比較的我々が参照しやすいものである。集成は他に 19 世紀のものがいくつもあるが、重要な史料は再校訂・新校訂が試みられているので見ることのできないものは少ない。

ビザンツ史の史料は決してこれらにとどまらないが、重要なものは以上の様に網羅される。

B. 史料補助文献

〈辞書〉

いわゆる「中世ラテン語」・「中世ギリシャ語」が古典語とどれほど異なっているかは詳しい専門に譲るが、少なくとも語彙のレベルで新たに古典期のそれに付加されたものもあるのは事実で、それについては別途参照する必要がある。

さしあたっては新約学・教父学の辞典である [Bauer] もしくは [Lampe] が必要となる。加えてビザンツ史料からの語彙に配慮した [Sophocles] も重要である。[Du Cange (Gr.)] は有名なラテン語版 [Du Cange (Lat.)] と異なり、拡幅再編纂されておらず、また古いので実用的とはいえないが参照にたるものではある。しかし何よりも、古典ギリシャ語の大辞典である [Liddle-Scott-Johnes] が、ビザンツ期のギリシャ語を読む際にも最も有用な辞典といえる。これがカバーできない語彙は、そう多くはない。この時代のギリシャ語についての概観は [Browning (1969)] が小著をものしており、また [Psaltis] が文法書の体裁で古典時代とは形態の異なる単語を整理している。

なお中世ラテン語の辞書には、[Lewis-Short] 及び [OLD.] といった古典用のスタンダードに加え、キリスト教語彙・俗語の集大成 [Du Cange (Lat.)] を筆頭として、キリスト教用語の羅仏 [Blaise (1967)] ・ [Blaise (1975)]、中世史公文書解読において最も利用される [Niermeyer] や [Med.Lat.WL.] も用いられる。

〈文書要覧〉

文書要覧とは、どの史料にどのようなことが書いてあるのかの梗概のことであるが、聖俗、各々の公文書に関しては成果がある。皇帝の発行した文書を年代順に整理、言及史料を列挙している [Doelger]、首都総主教の発行した同様の情報整理がある [Grymel et al.] がその双璧である。ただしこれらは近く新版が刊行されると聞く。歴史事項に関する史料情報は [QuKu] が便利であろう。なお邦語でのビザンツ歴史書の簡単な紹介として [フィルハウス (1986)] がある。

〈史料翻訳〉

本邦ではビザンツ史にまつわる史料の翻訳は、学術雑誌に掲載されたもの及び書物として出版されたものを含めても極めて少ない。一方で欧語圏での成果は [Glosser, Übers.] に見て取れる。ここではビザンツ史料がどのような近代語で翻訳されているかが一望できる。ただしその後の翻訳出版状況もめざましく、最新情報による補いは不可欠である。

ビュデ・ロエブの様なテキストと近代語訳の併載叢書に限らず、ビザンツ史の史料を翻訳しようとする出版や企画はドイツを筆頭としていくつも見られる。ドイツの [Byz.G-Schreiber] 叢書、オーストラリアの [Byz.Austr.] 叢書などはビザンツ研究者が各々史料翻訳を持ち寄って出版してきたものである。ペンギンブックスにもプセロスやアンナ＝コムネナといった重要な作家の英訳が所収されている。

本邦の [西洋古代史料集] に相当する様な抜粋史料の翻訳集としては、[Geanakopulos] や [Barker (1957)] が見受けられる。邦語でこうした書物はないが、今後の成果に期待しつつ現在までに史料の邦訳を試みている [テオドシウス法典研究会]、[井上浩一(ストラテギコン)]、[渡邊金一(プレトン)]、[木村・岩井]、[和田廣]、[大月康弘]、[伊藤敏樹]

他各氏の労を多としたい。

〈史料著者〉

記述史料を著した作家達について、いくつか人名事典的な解説書がある。この種の文献は、作家個人の情報を得られるのみならず、実際史料として用いたい著作がどのような校訂・注釈・研究史の背景を持っているのかを簡潔に教えてくれるので重要である。

古典として、ドイツのビザンツ学の開祖でもある [Krumbacher] が筆頭にあげられる。神学・歴史・文学などほぼ全てのジャンルにおける作家達を一人一人解説したもので、個人の業績としては驚くべきスケールのものである。

同様にビザンツ作家事典をつくってしまったのが、モラヴシツクの [Byzantinoturcica] である。彼はビザンツ史料においてトルコ人(イスラム勢)との関わりのある史料を全て挙げ、著者の検討をしていった。結果、およそほとんど全てのビザンツの文筆家を網羅することになってしまい、標題通りのビザンツとトルコの関係史研究であると同時に人名事典的な価値を持つ。

なおギリシャ語・ラテン語の作品を残した人物を古代・中世を問わず収録、その簡便さ、文献目録において定評のある [Tusc.Lex] には、ビザンツ作家について少なからぬ記述がある。

研究の集大成として [Hunger] がある。教会部門を除きビザンツ史全ジャンルにおける作家達を網羅的に評している。ただしこちらは人名事典というよりも研究書の体裁に近い。

一方神学部門の著作に関しては、本来、教会史学・教父学の守備範囲に属するが、その教科書は人名事典の体裁をとっているので参考文献たりうる。ドイツ語の [Altaner]、英語の [Quasten] がそれに該当し、8世紀までのキリスト教教義の正統的基盤を築いたラテン世界およびギリシャ世界の神学者達の解説がなされている。それ以後の時代をも含むビザンツ文学の神学部門は [Beck, Kirche] (後述参照)が担う。

〈事典〉

ビザンツ史にまつわる語句・テーマの解説を得るには、『オックスフォード・ビザンツ事典』 [ODB.3vols] の簡潔な叙述にあたるのが最も手早い。[RB.] という完成すればおそらく壮大な事典となったであろう企画は、第1巻の6分冊目まで刊行されたきり音沙汰ないので、目下 ODB. が最大の事典である。(但し建築・美術関連ではこれを凌ぐ [RBK.] が刊行中である。) なおビザンツ史の用語は西洋中世史関連の事典、例えば [Strayer]、[Lex.Mitt.(刊行中)] などにも記述がある。宗教(キリスト教)関連の事典、例えば正教会関連の [Onasch(1993)]、その他 [RGG.]、[DTC.]、[DHGE.]、[ODCC.]、[LThk.]、[NCE.]、[RAC(刊行中)] といった重要なものも同様。19世紀の [Ency.Th.] や [RE.Prot.] などの古い大事典にもビザンツ関連叙述がある。しかし事典にあって、適切であれば情報は簡便・最新のほうがよい。まずは ODB. や Strayer を参照すべきであろう。邦語で適切なものには [カ大(富山房)]、[新カ大(刊行中)]、[キ大(教文館)] がある。

なお初期ビザンツ史(首都創設からユスティニアヌス大帝まで)は古代史の一分野である『古代末期』の時代区分と重なるので、パウリーの事典 [RE-P.W.]、[NPauty(刊行中)]、その他 [Kleine.P.]、[Lex.Alt.]、[OCD.] も小稿ながら参照する所がある。しかし中期以

降のビザンツ史の語彙はほとんどない。

なお語句検索の際、本文内容だけでなく事典の刊行年と掲載参考文献名、執筆者名も忘れず書き取っておき、上記の他の事典でも同様にそれを調べて比較するといくつか大切なことがわかる。こうすれば研究年代による意義変遷、著名な執筆者存在、その立場、その語に関して最もよく読まれる基本書名が簡単に把握できるからである。これは項目数が多く、執筆者名・文献目録に国際的に信用のある事典ならではの検索法である。ビザンツ史は比較的それに恵まれているといつてよい。

実際に史料にあたりと類出する個人名については、人名事典かプロソポグラフィの専門著作にあたることになる。古代末期には [PLRE] が、教会人に関しては [DCB.] などが用いられる。著作をもつ有名な人物についてはむしろ前項《史料著者》を参照されたい。それ以降の時代に関しては、8-9世紀の [Winkelmann]、12世紀の [Skoulatos]、11-13世紀のドゥカス家について [Polemis]、13世紀以降のパライオロゴス家の [PLP.] などがあげられる。なおこの他にも構成者の素性調べは、統治構造研究ではなじみの作業なので論文レベルで参照できる場合も多い。なお [Glosser] シリーズは中世東欧圏の固有名詞事典である。

C. 通史概観文献

I. 通史

ビザンツ史には、全史を通観することができ、スタンダードな概説書として高い評価を受けている著作がある。それはG.オストロゴルスキーとH.G.ベックの2冊で、ビザンツ学の支柱として随時参照される。

オストロゴルスキーはビザンツ世界の封建制度研究で一時代を築いた旧ユーゴスラビアの学者であったが、彼はドイツ語で『ビザンツ国家史』出版してから絶大な評判を得た。その初版・第2版は議論の進展に従ってあるいは書き改められ、あるいは書き足されして第3版 [Ostrogorsky, 3te Aufl.] が1963年に上梓された。そのドイツ語第2版に従い英訳 [J.Heussy tr. (1968)] も流布し、広く読まれるようになったが、英訳書では訳語や版の相違で原典と食い違う箇所が想定されるのでドイツ語原著もあわせて参照されるべきであろう。

この著作が教科書として君臨する理由は、個人の手になる通史であるとか、内容が網羅的であるからという内的な価値だけではない。何より参考書として便利なのである。本書は324年から1453年までの帝国全史を時代順に追ってゆくのだが、その8章に区切られた各々の時代の叙述を始める前に、丁度その時期に該当する主要な一次史料についてページを割いて解説を付ける。

また叙述を構成する各段落がそれだけで、一つの研究テーマについての完結した説明を行う体裁を守り通している。このペースでできあがった400数十ページは、スタイルとしても研究としても歴史概説書の手本の様な書物である。ただしこの叙述を研究に用いる際には、彼以後の学界動向の調査は欠かせない。彼をたたき台にしてすでに多くの研究者が論文を発表しており、中には彼の説を覆した部門もあるからである。しかし全体的に見て今なおこれに取って代わるビザンツ史の書はない。

同じ様な通史に [Vasiliev, 2vols.] ペーパーバック版がある。オストロゴルスキーを研究者の教科書とするならば、こちらはまさに一国の転変をドラマティックに描ききった歴史書と言えよう。ヴァシリエフ自身はビザンツとアラブの関係史で知られる学者であり、それゆえか各時代に“Foreign Policy”の項目を設けている点が特徴である。

その他に、古典として評価されているが、[ギボン]の『ローマ帝國衰亡史』がビザンツ通史でもあったことは忘れてはならない。[Lemerle(1943)]がクセジュ叢書に寄せている小稿も読みやすいが、簡単すぎる上に出版も古く、また註や文献目録がないので研究書ではなく読み物として扱われる。またブレイエの [La vie..(1948)] や [Browning] も簡便な通史である。

こうした個人の手による通史ではないが、ケンブリッジ中世史講座(1966年版)の4巻第1分冊 [CMH.] IV-1は時代毎に専門家が稿を持ち寄っている。これには各章毎に豊富な文献目録が付いている。

邦語文献では、通史として完結しているのは和製ヴァシリエフ簡略版とでも言うべき [亀井高孝(1948)] や、図版が豊富でトピックの組み方が個性的な [シェラード(1967)]、皇帝たちが血の通う人間として描写されている [井上浩一：新書(1990)] がある。これらはビザンツ史の一般向け紹介という姿勢で出版されているが、より専門的である [和田廣：新書(1981)] や、[井上浩一(1982)] には残念ながら共にニケア帝国期・末期ビザンツの記述がない。編集の都合および学問上の主張などからそうした形となったのであろうが、ビザンツ史全体を見通した概説書の日本語による出版がまたれる。

一方そのオストロゴルスキーにおいてあまり触れられなかった部分、ビザンツ帝国の精神面はハンス・G・ベック [Beck, Kirche] が整理している。これはビザンツ史における正教会についてのドイツ語の基本書である。前半で制度・教区などに詳しく触れ、後半は神学という切り口からのビザンツ通史を配置している。神学に長けた著者はかなり詳しく論争に踏み込んだ叙述をしており、またローマ・カトリック教会との確執やカノン法についての解説も時代毎に整理している。ベックはこの後次々にビザンツ史の理念的側面・社会構造・文学作品をテーマにした多くの刺激的な論功を打ち出し、学界のリーダーとなる。そうした追随を許さぬ諸議論において、彼が研究者の信頼を勝ち得ている背景には、本書において見せた該博な知識と緻密な検討の姿勢がある。彼は正教会の通史部分を取り出して簡略にまとめてもいる [Beck(1980)]。この分野で英語では [Hussey(1986)]、邦語では [森安達也：山川(1978)] がある。正教会の理念的側面についてしばしば [Benz(1988)] が参照されている。

ビザンツ史を始めから終わりまで扱った通史ではないにせよ、限られた年代における通史文献もある。古代末期という時代については、詳しい研究動向と文献目録を [西洋古代史研究入門(1997)] で得ているので、そちらを参照されたい。ただ [Bury(I)]、[Jones(1964)]、[Stein(1949-59)]、[ティンネフェルト] は有益であろう。[Demandt] がこの分野の最新成果と聞くが、ビュアリやシュタインの質も今なお評判高い。

ヘラクレイオス朝については [杉村(1981)]、[Stratos(1978)] など。それ以降の時期は年代順に [Haldon(1990)]、[Treadgold(1988)]、[Bury(II)]、[Runciman(Lecapenos)]、[Bury

(III)] があげられる。ランシマンの名著 [Runciman(Crusader)] も質の高い参考書足りうる。12世紀は [Angold(1984)]、ニケア帝国は [Angold(exile)]、末期帝国の [Nicol(1992)]、などが代表的な研究者の著作といえよう。

II. テーマ別通史

通史・時代史が年代という客観基準でビザンツ史を縦割りにしたものであるとすると、民族・統治制度・国際関係などのテーマで割ってビザンツ世界を論じようとした文献としては、筆頭に前出ケンブリッジ中世史講座の第4巻第2分冊 [CMH.] IV-1 があげられる。なおそれより以前には往年の大ビザンツ史家が一同に介して各々専門のテーマ・題材を論じた [Baynes&Moss] もある。講座本形態ではなく、そうした複数のテーマにわたって個人が著したものも多く、著者の見解がストレートに反映されていて興味深い。[Beck(1978)] や [Mango(1980)] などがある。[Mazal(1988)] は文献を研究入門という体裁でまとめてもいて簡便である。

個々の事件や個別テーマに関しては触れない原則であるが、特定のテーマをあつかっていてもそれが他の研究に直接有効な参照道具となっている著作もある。例えば制度史の通史 [L.Brehier(1970)]、官職研究の [Bury(Adm.)] や [Guilland(1967)]。法制通史の [Zacharia(1955)] ・ [Freshfield(1932)]、コンスタンチノーブルのトポグラフィ [Janin, C'ple(1969)]、神学の概説 [Meyendorff(1974)]、文書学の [Urkundenlehre,(1968)]、度量衡の [Silbach(1970)] などである。そこで展開されている議論もさることながら、掲載されたデータは有益である。

D. 研究動向概観

I. 研究概観

ビザンツ史全体の学界・出版動向を紹介文献としては、[Charanis(1957)] や [Wirth(1969)] など昔のものから [Weiss(HZ.S.14:1986)]、[Schreiner(1986)] といった新しいものがある。本稿で名前を挙げられなかった文献でも、ここにはもれなく紹介されている。[Mazal(1988)] は研究概観ではないが、やはり「ビザンツ学の教科書」という標題に相応しくまとまっている。なお東欧語圏の出版については、[Sorlin] が定期的に TM. 誌上で発表した詳細な文献紹介が参考になる。

II. 文献目録

文献目録については、本稿で掲げるような書物には全て信用に足る文献目録が付いているはずであるからそれを参照されたいが、最新の状況を知るに当たり [BZ.] 誌が各号に持つ書誌を看過することはできない。各テーマに分かれ編集委員のコメント共にそこで紹介される文献の数は膨大なものである。BZ. 誌はドイツの HZ. 誌や日本の『史学雑誌』と性格の似た息の長いドイツのビザンツ学界誌であり、従来より文献目録製作の労をかけてきたのである。

後書き

先年(1996年)8月にコペンハーゲン大学で開催された第19回国際ビザンツ学会で、口頭発表においてケルン大のP.Schreiner教授が、まさに本稿における表現と同じくして *Instrumenta Studiorum* 《研究の諸道具(和田廣教授訳)》と題した報告を行ったと聞く。学会の印象記を執筆されている[和田廣(1997)]教授によれば、それは「研究の諸道具として不可欠な校訂本の刊行、百科・人名事典の編纂、文書要覧(Regesten)の新版の準備、諸データのコンピューター化、*Byzantinische Zeitschrift*の書誌部門の充実等に関する現状報告」であった。ビザンツ専門家達の間においても、こうした道具類を進歩させる努力がなされつつある。

残念ながら本稿では「データのコンピューター化」について全く触れ得なかった。しかし本来、ネット上に公開された情報へのアクセス法、国際学会レベルでの電算化状況などについてはビザンツ史のみならず全西洋史学分野における「研究入門」において不可欠な項目であると思われる。ここではビザンツ史にあつては小田謙爾氏が文献のデータバンク作成を試みておられることを紹介するにとどめる。

本稿の叙述はゼミ、文献所蔵の各大学図書館、「ビザンツ研究者のつどい」参加者、及び現役ビザンツ研究者の論考に多くを負っている。関係者各位に感謝の意を表す。しかしこの場で紹介されてしかるべき文献が欠落していたり、最新動向への配慮不足等の欠点については、情報を処理しきれなかった筆者に全て責任があることを明記し、専門家諸氏の訂正・補足を賜りたい。(了)

〈文献一覧〉

- [カ大(富山房)] カトリック大事典 5vols.(富山房 1940-70)
 [キ大(教文館)] キリスト教大事典(教文館 1963)
 [新カ大(刊行中)] 新カトリック大事典(研究社 1996)
 [ギボン] G. ギボン著中野好夫他訳「ローマ帝国衰亡史」全10巻(筑摩書房 1996)
 [シェラード(1967)] フィリップ・シェラード著 渡辺金一監修 タイムライフブックス編集部編「ビザンティン」ライフ人間世界史 11(タイムライフインターナショナル 1967)
 [ティンネフェルト] F. ティンネフェルト「初期ビザンツ社会」(岩波書店 1984)
 [テオドシウス法典研究会] 研究会訳「テオドシウス法典(1), (2), (3), (4)以下続」『専修法学論集』59(1993), 60(1994), 61(1994), 63(1995)
 [フィルハウス(1986)] J. フィルハウス, 酒井一郎訳「ビザンティン帝国における歴史記述」上智大学中世思想研究所編「中世の歴史観と歴史記述」創文社(1986)
 [井上浩一:新書(1990)] 井上浩一「生き残った帝国ビザンティン」(講談社現代新書 1990)
 [井上浩一(1982)] 井上浩一「ビザンツ帝国」(岩波書店 1982)所収「参考文献」pp.381-385
 [井上浩一(ストラテギゴン)] 井上浩一「ケカウメノス【ストラテギゴン】(上),(中)」『人文研究』(大阪市大)38-13(1986), 40-10(1988)
 [伊藤敏樹] G・ド・ヴィラルドゥワン, 伊藤敏樹訳「コンスタンティノーブル征服記—第四回十字軍」筑摩書房(1988); ロベール=ド=クラリ(伊藤敏樹訳・解説)「コンスタンチノーブル遠征記」筑摩書房(1995)

- [大月康弘] 大月康弘「アレクシオス・ストゥディテスによるカリストイキア改革のための2通の『覚え書き』」成城大学『経済研究』129(1995)
- [亀井高孝(1948)] 亀井高孝『東ローマ帝國史』生活社(1987)
- [木間瀬精三(1980)] 木間瀬精三「ビザンツ史研究入門文献」『宗教と文化』7(1980.3) pp.163-185
- [木村・岩井] 木村彰一・岩井憲幸「コンスタンティノス一代記—訳ならびに註—(1), (2)」『スラヴ研究』(北大スラヴ研究センター)no.31(1984)pp.1-17, No.32(1985)pp.191-215; 同「メドディオス一代記—訳ならびに註—」『スラヴ研究』(北大スラヴ研究センター)no.33(1986)pp.1-16
- [キリスト教史] 『キリスト教史』(平凡社ライブラリー1996)第2巻～第4巻
- [杉村(1981)] 杉村貞臣『ヘラクレイオス王朝の研究』山川出版社(1981)
- [西洋古代史研究入門(1997)] 伊藤貞夫・本村凌二編『西洋古代史研究入門』東大出版会(1997)所収: II G. 古代末期(後藤篤子・市川雅俊・松本宣郎)pp.230-247
- [西洋古代史料集(1987)] 毛利晶他編訳『西洋古代史料集』東大出版会(1987)
- [森安達也: 山川(1978)] 森安達也『キリスト教史論』山川出版社(1978)
- [和田廣: 新書(1981)] 和田廣『ビザンツ帝国』教育社歴史新書(1981)
- [和田廣] 和田廣「ヨハネス・マララス著『年代記』(1), (2)」『史境』27(1993), 32(1996)
- [和田廣(1997)] 和田廣「国際ビザンツ学会に参加して」『かいほう』No.57(1996)1-3
- [渡邊金一(1968)] 渡邊金一「付録ビザンツ史研究案内」『ビザンツ社会経済史研究』(岩波書店1968)pp.535-547
- [渡邊金一(プレトン)] ゲミストス・プレトン(渡邊金一訳)『法の精神』の祖型(続・完): 一ビザンツ文人のペレストロイカ建白書(一橋大学社会科学古典資料センターStudy Series No.22(1990))
- [Altaner] B.Alterner & A.Stuiber, *Patrologie* (Freiburg im Breisgau 1978).
- [Angold(exile)] M.Angold, *A Byzantine Government in exile* (Oxford 1975)
- [Angold(1984)] M.Angold, *The Byzantine Empire 1025-1204, a political history* (New York 1984)
- [Barker] E.Barker, *Social and Political Thought in Byzantium* (Oxford 1957)
- [Bauer:] W.Bauer, *Griechisch=deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der übrigen urchristlichen Literatur* (1988)
- [Baynes&Moss] N.H.Baynes & H.St.L.B.Moss ed., *Byzantium an introduction to east roman civilization* (Oxford 1961)
- [Beck(1978)] H.G.Beck, *Das Byzantinische Jahrtausend* (München 1978)
- [Beck(1980)] H.G.Beck, *Geschichte der orthodoxen Kirche im byzantinischen Reich* (1980)
- [Beck, Kirche] H.G.Beck, *Kirche und theologische Literatur in byzantinischen Reich* (München 1959)
- [Benz] E.Benz, *Geist und Leben der Ostkirche* (München 1971)
- [Blaise(1967)] A.Blaise, *Dictionnaire latin-français des auteurs chrétiens* (Brepols 1967)
- [Blaise(1975)] A.Blaise, *Lexikon Latinitatis Medii Aevi* (Brepols 1975)
- [Bréhier, institution] L.Bréhier, *Le monde byzantin, Les institutions de l'empire byzantin* (Paris 1970)
- [Browning] R.Browning, *The Byzantine Empire* (New York 1980)
- [Browning(1969)] R.Browning, *Medieval and modern Greek* (London 1969)
- [Budé] Les belles Lettres, Collection byzantine (Collection Budé): アンナ・コムネナ; ミカエル・プセロス; コンスタンティヌス7世 etc.
- [Bury(I)] J.B.Bury, *History of the Later Roman Empire, from the death of Theodosius I to the death of Justinian*, 2vols. (New York 1958)
- [Bury(II)] J.B.Bury, *A History of the Eastern Roman Empire, from the fall of Irene to the Ac-*

- cession of Basil I, A.D.802-867* (London 1912)
- [Bury (III)] J.B.Bury, *A Supplement to the History of the Later Roman Empire (976-1057 A.D.)* (Chicago 1974)
- [Bury (Adm.)] J.B.Bury, *The Imperial Administrative System in the Ninth Century, With a Revised Text of The Kletorologion of Philotheos* (New York 1911)
- [BZ.] *Byzantinische Zeitschrift* (München)
- [Byzantinoturcica] Gy.Moravcsik, *Byzantinoturcica*, 2vols. (Berlin 1958)
- [Byz.Austr.] *Byzantina Australiensia* (Australian Association for Byzantine Studies)
- [Byz.G-Schreiber] *Byzantinische Geschichtsschreiber.*
- [CFHB.] *Corpus Fontium Historiae Byzantinae* (1967ff.)
- [Charanis (1957)] P.Charanis, "Bibliographical Note," in Ch.Diehl (N.Walford transl.), *Byzantium: Greatness and Decline* (New Jersey 1957) 301-357.
- [CMH.] *Cambridge Medieval History* vol.IV-1 & 2 (1966-7)
- [CSHB.] *Corpus Scriptorum Historiae Byzantinae*, eds.B.G.Niebuhr, I.Bekker, L.Dindorf, Bonn (1828-97) voll.50
- [DCB.] *Dictionary of Christian Biography*, 4vols. (1877-87)
- [Demandt (1989)] A.Demandt, *Die Spätantike. Römische Geschichte von Diocletian bis Justinian 284-565 n.Chr.* (München 1989)
- [DHGE.] *Dictionnaire d'Histoire et de Géographie Ecclésiastique.*
- [Dölger] Franz Dölger, *Regesten der Kaiserurkunden des oströmischen Reiches von 565-1453* (Teil 1.2.3.4.5.), München, Berlin (1924 ~)
- [DTC.] *Dictionnaire de Théologie catholique.*
- [Du Cange (Gr.)] Du Cange, *Glossarium ad scriptores mediae et infimae graecitatis* (1958)
- [Du Cange (Lat.)] Du Cange, *Glossarium mediae et infimae latinitatis* (1954)
- [Ency.Th.] *Encyclopédie Théologique.*
- [FM.] *Fontes Minores* (Frankfurt)
- [Freshfield (1932)] E.H.Freshfield, *Roman Law in the Later Roman Empire* (Cambridge 1932)
- [Geanakopulos] D.J.Geanakoplos, *Byzantium; Church, Society, and Civilization Seen through Contemporary Eyes* (Chicago 1984).
- [Glossar] *Glossar zur frühmittelalterlichen Geschichte im östlichen Europa: Serie B Griechische Namen bis 1025:*
- [Glossar, Übers.] *Bibliographie der Übersetzungen griechisch-byzantinischer Quellen* (Bearb.: Wolfgang Schule), (Wiesbaden 1982)
- [Grymel et al.] V.Grumel, *Les regestes des actes du patriarcat de Constantinople*, vol.1 (Fasc.1, 2, 3, 4, 5), *Les Actes des Patriarches* (1932 ~)
- [Guilland (1967)] R.Guilland, *Recherches sur les institutions byzantines*, 2 vols. (Amsterdam 1967)
- [Haldon (1990)] J.F.Haldon, *Byzantium in the seventh century: the transformation of a culture* (Cambridge 1990)
- [Hunger] H.Hunger, *Die hochsprachliche profane Literatur der Byzantiner*. 2vols. (München)
- [Hussey, J., tr. (1968)] G.Ostrogorsy, J.Hussey tr., *History of the Byzantine State* (Oxford 1968)
- [Hussey (1986)] J.M.Hussey, *The Orthodox church in the Byzantine Empire* (Oxford 1986)
- [Janin, C'ple (1969)] R.Janin, *Constantinople byzantine* (Paris 1964)
- [JÖB] *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik* (Wien)
- [Jones (1964)] A.H.M.Jones, *The Later Roman Empire: 284-602*, pap.2vols., (Oxford 1964)
- [Jus Gr.] J.& P.Zepos, eds., *Jus graecoromanum*, 8vols. (Athens 1931)
- [KleineP.] *Der Kleine Pauly*, 5Bde (dtv 1979)

- [Krumbacher] K.Krumbacher, *Geschichte des byzantinischen Litteratur von Justinian bis zum Ende des Oströmischen Reiches (527-1453)* (München 1897)
- [Lampe] G.W.H.Lampe, *A patristic greek Lexikon* (1989)
- [La vie.. (1948)] L.Bréhier, *Vie et mort de Byzance* (Paris 1948)
- [Lemerle (1943)] P.Lemerle, *Histoire de byzance* (Que sais-je [107] 1996=1943)
- [Lewis-Short] C.T.Lewis & Ch.Scott, *A Latin Dictionary* (Oxford 1879)
- [Lex.Alt.] *Lexikon der Alten Welt.*
- [Lex.Mitt.] *Lexikon des Mittelalters.* (1977 ff.)
- [Liddle-Scott-Johnes] H.Liddel & R.Scott (S.Johnes), *A Greek English Lexikon* (Oxford 1996)
- [Loeb] Loeb Classical Library (Harvard): プロコピオス etc.
- [LThk.] *Lexkon für Theologie und Kirche.* (1957-67)
- [Mango] C.Mango, *Byzantium, the city of the New Rome* (London 1980)
- [Mansi] J.D.Mansi, *Sacrorum conciliorum nova et amplissima collectio* (1759ff)
- [Mazal (1988)] O.Mazal, *Handbuch der Byzantinistik* (Graz 1988) 仏訳 *Manuel d'études Byzantines* (Brepols 1995)
- [Med. Lat.WL.] R.E.Latham ed., *Revised Medieval Latin Word-List* (Oxford 1965)
- [Meyendorff (1974)] J.Meyendorff, *Byzantine Theology* (New York 1974)
- [MPG.] *Patrologiae cursus completus, series Graeca*, ed.J.P.Migne (1844ff.)
- [NCE.] *New Catholic Encyclopedia*, 14 vols. + Index (1967)
- [NPauly (刊行中)] *Der Neue Pauly*, 16 vols. (1996-)
- [Nicol (1992)] D.M.Nicol, *The Last Centuries of Byzantium 1261-1453* (Cambridge 1992)
- [Niermeyer] J.F.Niermeyer, *Mediae Latinitatis Lexikon Minus* (Brill 1993)
- [OCD.] *Oxford Classical Dictionary*, 2nd ed. (1970), 3rd ed. (1996)
- [ODB.3vols] A.Kazhdan, ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, 3vols, (1991)
- [ODCC.] *Oxford Dictionary of Christian Church* (2nd ed.1974, 3rd ed.1996)
- [OLD.] P.G.W.Glare, *The Oxford Latin Dictionary* (Oxford 1982)
- [Onasch (1993)] Onasch, K., *Lexikon Liturgie und Kunst der Ostkirche.* Buch verlag Union (1993)
- [Ostrogorsky, G., 3te Aufl.] G.Ostrogorsky, *Geschichte des byzantinischen Staates*, 3te Aufl. (München 1963)
- [PLP.] *Prosopographisches Lexikon der Palaiologenzeit.* (1976 ff.)
- [PO.] *Patrologia Orientalis.* (1907 ff.)
- [Polemis] D.I.Polemis, *The Doukai -A Contribution to Byzantine Prosopography* (London 1968)
- [PRLE] A.H.M.Jones, J.R.Martindale, and J.Morris, *The Prosopography of the Later Roman Empire. I (A.D.260-395), II (A.D.395-527), III (A.D.527-641)*, Cambridge (1971-92)
- [Psaltis (1974)] S.B.Psaltis, *Grammatik der Byzantinischen Chroniken* (Göttingen 1974)
- [Quasten] J.Quasten, *Patrology* 4vols., (Westminster, Maryland 1950-56)
- [QuKu] J.Karayannopulos/G.Weiss, *Quellenkunde zur Geschichte von Byzanz (324-1453).* 2Bde. (Wiesbaden 1982)
- [RAC. (刊行中)] *Reallexikon für Antike und Christentum.* (1941 ff.)
- [RB.] *Reallexikon der Byzantinistik*, 6facs. (1968-76)
- [RBK.] *Reallexikon zur Byzantinischen Kunst.*
- [REB.] *Revue des Études Byzantines* (Paris)
- [RE-P.W.] *Pauly's Real-Encyclopädie der classischen Altertumswissenschaft.*
- [RE.Prot.] *Realencyklopädie für protestantische Theologie und Kirche.* (1898-1913)
- [RGG.] *Die Religion in Geschichte und Gegenwart.* 3te Aufl. (1957-65)

- [Rh.-Pot.] Rhalles, M.Potles, *Syntagma ton theion kai hieron kanonon* (Σύνταγμα τῶν θείων καὶ ἱερῶν κανόνων), 6vols. (rp.1966)
- [Runciman (Lecapenos)] S.Runciman, *The Emperor Romanus Lecapenus and His Reign : A Survey of 10th-Century Byzantium* (Cambridge 1929;rp.1988)
- [Runciman (Crusader)] S.Runciman, *History of the Crusaders*, 3vols. (Cambridge 1951-54)
- [Sathas] K.N.Sathas, *Mesaionike Bibliotheke* (Μεσαιωνική Βιβλιοθήκη), 7vols. (rp. Hildesheim 1980)
- [SC.] *Sources Chrétiennes* (Paris)
- [Scheltema] H.J.Scheltema ed., *Basilicorum Libri LX* (Groningen 1955)
- [Schilbach (1970)] E.Schilbach, *Byzantinische Metrologie* (München 1970)
- [Schreiner (1986)] P.Schreiner, *Byzanz, Oldenbourg-Grundriss der Geschichte* Bd.22 (München 1986)
- [Skoulatos] B.Skoulatos, *Les personnages byzantins de l'Alexiade: Analyse prosopographique et synthèse* (Louvain, 1980)
- [Sophocles] E.A.Sophocles, *Greek Lexikon of the Roman and Byzantine Periods* (1992=1914)
- [Sorlin] Irène Sorlin, *Bulletin des publications en langues slaves*, in TM.2 (1967) 489-568 ['45-62] /TM.4 (1970) 487-519 ['63-68] /TM.7 (1979) 525-579 ['68-78] /TM.10 (1987) 491-541 ['78-85] /TM.12 (1994) 501-548 ['86-91]
- [Stein (1949-59)] E.Stein, *Histoire du Bas-Empire*, 2vols. (Paris 1949-59)
- [Stratos (1978)] A.Stratos, *Byzantium in the seventh century* (trans.by H.T.Hionides) (Amsterdam 1978)
- [Strayer] J.R.Strayer ed., *Dictionary of the Middle Ages*.
- [TM.] *Travaux et memoires* (Paris)
- [Treadgold (1988)] W.Treadgold, *The Byzantine Revival, 780-842* (Stanford 1988)
- [Tusculum] *Tusculum Lexikon* (München); 仏訳 *Dictionnaire des Auteurs grecs et latins de l'antiquité et du moyen âge* (Brepols 1991)
- [Vasiliev, 2vols.] A.Vasiliev, *History of the Byzantine Empire*, 2vols (London 1952,58)
- [Urkundenlehre, (1968)] F.Dölger u. J.Karayannopoulos, *Byzantinische Urkundenlehre I. Die Kaiserurkunden* (München 1970)
- [Weiss (HZ.S.14: 1986)] G.Weiss, *Byzanz, Kritischer Forschungs- und Literaturbericht 1968-1985*, (München 1986)= *HZ.Sonderheft* 14.
- [Winkelman] F.Winkelman, *Quellenstudien zur herrschenden Klasse von Byzanz im 8.und 9. Jahrhundert* (Berlin 1987)
- [Wirth (HZ.S.3: 1969)] P.Wirth, 'Literaturbericht über byzantinische Geschichte,' in *Historische Zeitschrift: Sonderheft* 3 (1969) 575-640.
- [Zacheriä] D.K.E.Zacheriä v.Lingenthal, *Geschichte des Griechisch-Römischen Rechts*, 3te.Aufl. (Württemberg 1955)